合氣柔術傳書

Distributed by the Aikido Sangenkai:
http://www.aikidosangenkai.org

目録

十八巻内

序文

武ハ神ノ御姿御心ヨリ出デ真善美ナル我建國ノ一大精神ナリ

夫レ武術ハ皇國ノ道ニ起リ百事神ト人トノ合氣ヨリ言靈表現ノ誠ヲ以テ基準トナシ誠ノ心即チ大和魂ヲ更ニ体ニ練及シ誠魂ノ練磨統一ト其ノ魂ヲ以テ肉身ノ統一ヲ計リ心身ニ寸隙ナキ心魂一如ノ統一ヲ以テ誠ノ人ヲ作ルヲ以テ目的トス

凡テ人生レテ非常時ナリ・更ニ稽古ニハ事毎ニ大試練ト大修業タル超非常時ヲ画キ出スモノナレバ能ク死生ノ巷ヲ往復シ死生觀ヲ超越シ如何ナル世ノ超非常時モ死地ニ入ルモ平日ノ如ク安ク明カク開展スル道ヲ得ルヲ以テ主トス

古言ニ武ハ神ヨリ天皇ニ傳ハリ更ニ武將ニ及ブト實ニ至言ナリ・即チ斯道タル皇道ノ誠ナリ是ニ依リテ天地ノ眞理ヲ悟リ練現シ天地

経綸ノ為メ天地ノ呼吸ト呼吸ニ依リ世ノ様ヲ腹中ニ修メ治国平天下破邪顕正ノ道ヲ講ジ正シキ身魂一如ノ誠ヲ現シ其術タル一ヲ以テ萬ニ當ルヲ知リ以テ國体ヲ闡明シ皇綾ヲ宣揚スルヲ本旨トスルモノナリ

此著書ハ昭和八年夏期講習トシテ時ト場所ト受講者ノ心ニ應ジテ教授セシモノナリ

世相ノ開轉ト人ノ心ノ進ムニツレテ武術ハ常ニ先驅ヲツケテ開轉スルモノナレトモ此書ヲ見テ練磨スルニ於テハ知ラズ知ラズノ内ニ此武術ノ真意ヲ悟リ真ノ達人トナルモノナリ

乞フ此著書ハ教授ヲ受ケシモノノ為ニ又入門者ニ對シユルシトシテ渡スモノナレバ切磋琢磨ノ日ヲ重ネ極意ヲ得益々奥ノ技ニ進ミ教ヲ受クベク著者ハ茲ニ一言依頼スル次第ナリ

以テ序文トナス

著者識

目次

武道奥義（歌）
技法真髄（文句）
立業
一 正面 ……（五）
二 横面 ……（八）
三 肩 ……（一〇）
四 胸元取り ……（一五）
五 手頸を掴む事 ……（一七）
後業 ……（二一）
後襟 ……（二二）
技法解説（繪）
座り業
正面 ……（一）
横面 ……（三）
肩 ……（四）
袖 ……（五）
両袖 ……（七）
胸 ……（八）
首締 ……（一〇）

半身半立 ——（二三）

立業

正面 ——（三九）

横面 ——（四九）

肩 ——（五九）

袖 ——（七五）

肩 ——（九五）

手（片手）——（一〇一）

合氣投げ ——（一〇三）

胸 ——（一三二）

胸と手 ——（一四五）

首締 ——（一四九）

後業

後襟 ——（一六三）

肱 ——（一八四）

手頸 ——（一九〇）

武道奥義（歌）

一 古の初め降臨し武の使命と国の守りと君の御影に
一 古の初め降臨し霊鏡剣国を建ます神の御こゝろ
一 精神天地の心にまかせつゝ神のこゝろをつくせ武士
一 ありがたやいづとぞの今象十旗々家進め瑞の御影に
一 まよいなば悪しき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな
一 上段は天て上段式の理におき突く構をくづして勝つべし
一 敵下段固し構への中段に下り下りに移りかかるな
一 高上は秘多も構えも何らはこそ構えのそむな前そ見えたり
一 前後とは構先いつしつゝ敵そかし構をくずし身そに切込み勝つべし
一 たゝかはば切るも帰も打捨てゝ人の心はすぐに馳せ行け
一 すきゝもなくもなく身ゝきつめたる敵の太刀皆打捨てゝ踏込て切れ
一 敵人の寄り来りて打つときは一足よけてすぐに切るべし
一

一人は皆何ともあれ覚悟して粗忽に太刀を出すべからず

一敵の太刀弱くなさむと思ひなば まつ飛込みて切るべし

一敵多勢吾をかこみて攻むるとも 一人の敵と思ひたゝかへ

一取りまはし樹の林に入るときは 太刀にては樹の枝笑へとぞ知れ

一又しても汀語る者に思ふかな いづとみつとの有難き道

一立ちむかふ剣の林を学くに たゞ身ては 敵の心とぞ知れ

一祕をは更に祕に練り上げて 顕幽一如の気跡をしれ

一武術とは神の御姿御心ぞ いづとみつとの御教守るし

一道のためまかれる敵を呼び来し 言向け進め 愛の剣に

一太刀ふるひ前にあるかと襲ひくる敵の後に吾は立ちけり

一まづ敵に切りつけさせて吾の姿後に立ちて敵を切るべし

一呼吸さ ゆす一人の敵もんせよ 多勢の敵は前後左右に

一精神や気のわざを極むれば如何なる敵も戦ふすべなし

一いくのわざの稽古にこゝろせよ一を以て万に当るぞ武芸の道

一右手をば陽にあらはし左手は陰にかへして敵をみちびけ

一ふりまはす太刀に目付けて何のせん拳は人の切るところなれ

一あるとあれ太刀を習ふて何かせん唯一筋に思ひきる可し

一せん太刀を天に構へて早くつめよ逃しなば横にきる可し

一山水にあたりて立たぬ光輝こそ清くこゝろある人もなけれど

一無明とは陰やの人か又月の心すも又すも知る人ぞなし

一攻めんとば×必らしふ気を抑へつゝ敵の構へにうつりかはるな

一上段は敵のこゝろをくみ定めん陰の心を陽にこそ見れ

一中段は敵の心を真中にうつり調子を図し拳に

一下段をば陽の心を陰に見て安く剣を清眼とし　れ

一 其那にても人目のあたる事心持て来り行くとても敵はゆるさし

一 義人はお宮様やらくやけ様意の稽古まいたなりけるま

技法忘隨

立業

一、正面

右或は左手にて打込の事

手刀を以て（或は拳）敵を打つ術天地の息と自分の息とは同じものである筈だから動作も陰陽合致の業を手刀に及ぼして打ち込む。斯く打込んで来る敵に向ってはいつも自分の心に敵を包む様な雄大な気持で対すれば敵の動作を見拔く事が出来る其處でそれに合して右或は左に体をかはす事も出来る。又敵を自分の心に抱き込んだら自分が天地より受けた大處の道に敵を導く事が出来る。例へば打たすべく見せてそれに従って敵に打込ませ左或は右に除けて敵を倒す事が出来る。生死の境を超越しいかなる事に臨んでも九分九厘敵の壓迫を受けて死地に入っても明かに道を求むる事が出来る。是等の事

を心に置いて鍛練しなければならぬ

古は兵法を敷き畳の上で道によつて天地の意氣を以て戰鬪する呼吸を對照的に練磨したのである。此の場合適當の距離をとる。これは丁度剣道で言へば水月の理即ち敵との距離を水の位とし（あたらぬ場合）それを彼我の体的霊的の距離を中に於て相對す。敵火を以て攻め來らば水を以て防ぐ敵を打ち込ますべく誘つた時は水が始終自分の肉身を圍んで水と共に動く。即ち古の城も同じで濠があつて始めて城が成り立つ城の周圍には敵に攻められぬ様に水がある人体の場合は敵が打つて來れは水と共に開くから打ち込まれない

城である場合は之を守る人に誠がなければ陥落する。然し日本の戰法は其の形の城を人間の体に移し生きた人が生きた城を作るのが武道の練磨である。すべて古の中はかくなつてゐる。日本の国を見

ても周囲は海で仲々悪魔の軍勢が無闇に攻め込めない様天然の城をなしてゐる。之を守るにはやはり生きた各々の城を築き此城に祭り合せて行かなければならぬ。是が武道の練磨である。世界を見ても水を以てつぶされぬ様になってゐる。更に大きくは氷山で囲ひ又地球は地球で雄大な自然の防備が有り宇宙には宇宙の防備が出来てゐる。各自武道をなす者は神の経綸になる大自然の大城をよく守って更に美はしき城を築く為に各々稽古をしてゐる次第である。此の心持をもつて打ち込むにも打ち込まれるにも此の眞理と合した呼吸で行はなければならぬ。これを修めば智、仁、勇自ら出で来り眞一つの大和魂になり全身剣ともなり又是れ無我の境に入る事が出来る。すべて武道は悟りから悟りへと肉体に美しい精神の國を建設する事が出来る。大にしては天下國家を守り小にしては一身を守る。結局大和

魂の練磨である、又岩戸開きの行である。且つ人の心は水火を司るものなれば是の水火陰陽の理に依りて敵氣を以て當れば氣に當り水をもって来らば水に當り火を以て来れば火に當り今日の化學戦の上に想を馳せ練磨することを肝要とす。

二、横面

手刀をもって敵の横面若しくは敵を斜に肩口より切り下す氣持で打つ。相手は敵の出様を知って敵の氣を誘ひつゝ左足を軽く引き敵の氣を抜き、其の隙を逃さずして陰陽（水火）をもって攻めたてる氣で敵の右（或は左）の手首を左手前に引き摑み右手を持添へて左足を大きく踏み込み右に轉しつゝ陰陽の息で敵を右前に投げる。丁度敵の火鋒と吾が火鋒と衝突して敵の主力は吾が左翼に廻り前と左横より攻め立てられる戦況の際に此術を行ふ。故に丁度劍をもって前か

ら左に切り拂ひ同時に自分の精鋭を以て今や吾が右翼を脅威せんとする敵に向って進んて敵の中堅を突き吾が右翼を脅威せんとする勢を殲滅する。斯る兵法の下に此の横面動作が毎日疊の上で行はれるのである。つまり敵と自分との出合頭の兵法であり行軍中の兵法である。たくみに地區地物を利用しての戰法である。そこで上、中、下三段に分れての兵法と口傳があるがこれは稽古に際して傳ふべし
剣法で言へば（小さく目先のことを言へば）左足を引きながら八双に振りかぶって切り降す際その水月の理をよく考へて其の剣を使へない様に真正面に切り込む。又剣法として八双から左に引く所の左に切り降す切り方を習ひ同時に左足を踏込みつゝ右に切り上げる所の剣法を習ひ又同時に体を轉じて後の敵を切り拂ふ。この四つの剣法を習ふ爲に横面打ちの技が定められた。

三、肩

之は単に肩をつかむことは普通ぼんやりしてゐる遊軍の肩をとるのは容易なれど戦闘開始の上でとることは至難である・そこで敵に目かくしを加へつつ左手又は右手で肩をとる

肩をとられたる場合はそれに乗じ目かくしをうたれざる様に左手で拂ひのけて肩をとられたならそして敵が引いたらそれに乗じて右で面をうち左で水落をうって右後に倒す動作である。

この武術に於て特に注意を要することは心と体及び力が全く一致して統一しなければならぬ、力は体と心の合致でこれらが共に働かねばならぬ

もし敵が早く左手にて自分の肩を取り引よせながら頭上目かけて打ち込んで来た場合には速かに右拳を以て敵の面を打ち左拳を以て

敵の右手を拂ひ敵の右手首を両手にてつかみ速かに左足を前に進め体を轉じて敵を後方に投げるべし（普通は左が陽で右が陰であるが働の場合は逆になる）。古来より武術は神より天皇に天皇より武將に傳はつたもので之は古言に出てゐる

凡て力は動、静、解凝、引弛、分合とより成立つ所の道理を神習ひ日々の稽古に身体に魂こめて画き出し肉体を鍛磨して始めて武道になる

肩をつかみに来たらそれは剣を八双に振りかぶり肩より斜に切りおろすか又は足を切るつもりで切りつけると思ひながらなさねばならぬ。先づ八双にかぶつて肩口に向つて切つて来る時又は大上段に振りかぶつて切りかゝつて来る時には肩そのものの精神で敵の剣を

誇ひ右足同時に進めて敵を打倒すか左足引いて倒す。

昔剣法に皮を切らして肉を切り肉を切らして骨を切るといふ戦法があった。之は切りかゝる剣の下に泰然として皮を切らして同時に敵の肉を切った戦術であったが今日では皮を切らすさへ惜しむ。たとへ皮でも切らすことはつまり自身を傷け又は危くすることになるからそれではならぬ、自己の身をそこなはぬ様にして敵を倒さねばならぬ。即ち心で導けば肉体を傷けずして敵を倒すことが出来る。

導即倒といふ工合に武道を練り上げねばならぬ。皮を切らして肉を切る法は各人の法であるが非常に危険な方法で日本人の為すべき武術ではない戦争の時多少犠牲を拂つて敵を全滅させるのではあぶない。自分の軍は一人も損せずして敵を倒すのが真の武術であるいつも安全な破れざる位置にあって敵を倒す、つまり一兵も損せ

すして敵を従服させる
この覚悟が武術の稽古に最も必要である
更に一歩進んで敵の感ずる隙なからしめる様充分練磨しなければならぬ。敵が肩を掴むと同時に敵の面をうつて左足を一歩進め敵の右拳を掴んで前にねじ倒すのはすべて心の働きでなす、心を体に画き出すから心の通りにゆく、体を練るのであるがその実は心を練るのである敵の肩を掴んでひくにもこの心をもつて為すから相手もそれに感して肩をつく。即ち武術は心の表現である，敵の心中に相手の肩を引くといふ心が起つた時に既にその心が当方に分るのが肝要である。又心で自分の肩を敵に取らすべく導くのが一つの武術で之が分つたら敵を殪すのは容易である。然し之は心で分るだけでは何もならぬ。此の道理を体の上に分り実現しなければならぬ。それが

即ち武術の稽古である

武術には、エイ、ヤー、トー、ハッ、等の掛聲がある。この四つに限らず日本人が言葉に出せるだけの掛聲がある筈である。

天地の呼吸に合し聲と心と拍子が一致して言魂となり一つの武器となつて飛び出すことが肝要で之を更に肉体と統一する。聲と肉体と心の統一が出来て始めて技が成り立つのである。霊体の統一が出来て偉大な力を猶更に練り固め磨き上げて行くのが武術の稽古である斯くしてゆくと剣で切るべく仕向けることが分り又世の中の武術の大氣魂がその稽古の場所及び心身に及んで練れば練る程武の氣魂が集りて大きな武術の太柱が出来る。柳生重兵衛も塚原卜傳もあらゆる古の達人名人の魂が全部集り来り又武術の氣も神のめぐみによつて全部集り来るの理を知り稽古に精魂をつくすべし

この人間に與へられた所の言葉の魂を肉身と一つにして日々稽古して天地の呼吸と合致せねばならぬ。或る時には「エイ」と切り。「ヤー」と受け「ドー」とはなれる。これは同じ力の者同志は隙がない時には「ドー」とはなれることが出來るが一方に隙があれば「エイ」「ヤッ」と切られてしまふ。

古はかく「エイ」「ヤッ」と合し「ドー」とはなれ又・エイヤーと結ぶそこにお互に隙のない様練磨を重ねて行ったのである。かくの如く熱心に稽古の度を重ねるに至らば敵と相對した時に未だ手を出さぬ内に既に敵の倒れた姿が見える、そこでその方向に技をかけると面白く投げられる技は熱心になればかくなるものと信して練磨すべし

四、胸元取り

敵が胸元をもつと同時に右手で面左で敵の左腕を打ち深く左足を

敵前方に踏込み左肩で押し氣味で前方へ倒す
胸元をとられるのは槍で突いて来るか又剣を青眼にかまへて突いて来るのと同じ道理である。胸をとつて引くのと突くのとがある。
第一に胸元を敵にもたすといふことは敵の心をこちらへ引きよせることで敵を導いて置いて体をかはす突いて来た時には敵の突く氣持を利用して左足引いて体をかはし左後方に投げる。又胸元をもつて引く時は引かすべくつかませて其の引くにまかせて進み前方に倒す、胸元に敵の注意力を集めさせ引くといふ虚に乘じて倒す
戰爭の場合であれば斥候兵を本隊の如く見せかけその方面に敵の主力を導き側面及び背後から奇襲する。胸元が斥候である
斥候で敵兵を誘ひ側面及び背後から素早く奇襲して敵に防備のいとまなからしむる。是が古来の戰法である。故に稽古の場合引かす

べく胸元をもたせ同時に敵に体の変更をさせる暇を與へず右で面を打ち左で腕を叩いて倒す。然し遂には持たせずして敵の「胸元を取る」といふ心を知り自分の心で持たせてこちらへ敵を誘ひ投げる様になる

五、手頭を掴む事

手と足と腰の心よりの一致は心身を守るには最も必要な事で殊に人を導くにも又導かれるにも手によってなされる。一方で導いて置いて一方で倒す足を良く理解しなければならぬ敵が引かうとした時には先づ敵をして引く心を起さしめ引かすべく仕向ける。武術の鍛練が出来て来ると敵よりも先に敵の不足を満足さすべく、こちらから敵の隙即ち不満の場所を見出して業をかける。此の敵の隙を見出すのが武道である。

素盞鳴尊の御子みゆき姫尊は尚武の氣に富んでゐられたのでその下に天下の英雄が澤山集まつた。あまり英雄が集るので何事か爲すのではないかと天兵を差向けられた、然し天兵に敵對する氣持のない尊は城門を開いて將兵を導き入れ歡待これ盡して和合した。眞の武道は敵を殲滅するだけでなく其の敵對する處の精神を敵自ら喜んで無くなさしめる樣になさねばならぬ

和合の爲にするのが眞の武道である。地上に表はれたものと其の精神とが一如となつて和合する樣に日々の稽古を爲すべし。子頭を取りに來たならば左足引いて取らんとする手をもつて敵を導き一方の手をもつて首へ打ち下ろす。支那の教は殪れて後已むといふが殪れても尚やまず盛んである。初志を貫徹してやまぬといふ氣持でなければならぬ、殊に武術をするものに於ては人は生通しの理を悟ら

ねばならぬ。日本の武術は皆天地の教を書き出すもので、剣へは無数の槍でとりまかれ、おし進んで来た時と虫もそれを一人と看なしてなす。古人の如く後に柱や樹木を小楯にする事は間違ってゐる。進んで来る敵の心を小楯に其の眞正面に立って突いて来る槍の眞中心に入り身轉換の法に依って無事に其圍みを破って安全地帯へ出る斯く周圍を全部敵にとり巻かれた時と雖も入り身轉換の法に依って破れざる姿勢で敵を壓迫しなければならぬ。

支那の古人の言に「己れを知る者の爲に死す」といふのがあるが是は外來思想で日本の精神でない。支那ではそれてよかろうが日本では自分の体は自分のものであって自分のものでない。神より頂いたもので即ち天皇のものである。天皇のものである以上自分勝手に其身を殺すことは出来ぬ。故に己を知る者の爲に殪れるといふ事は

眞の日本精神にもとるもので儒教と共に入り來つた支那思想である

例へ自分は人から知られずとも誠心誠意死を以て天皇にむくいねばならぬ。故に手一本でもそれが手の役を爲すものである以上これを傷けない様にせねばならぬ。かゝる一部の教でも日本の武術には表はれて居る。敵を殪すのが武術の稽古であるから此の道理をよく汲んで体に畫き出して稽古すべし。大勢の時は一人と思ひ一人の時は大勢と思って戰はなければならぬ。一を以て萬にあたる積りで隙を與へない様にする。單に一人と一人の敵の切り合ひでなく天地の經綸の爲になすのが武術の稽古である。心身に寸隙なき大和魂の誠を作り上げ上中下三段前後左右の敵を誠入身轉換法合氣により心より征伏するの稽古が必要である。如何な超非常時に入り世界全部敵となりし時此心技が必要である。心ゆるすな

神の心を人の肉体に建設する・闇を服破する光の如く更に〳〵深く稽古を積まねばならぬ

古人の極意の書に「太陽の光が襖を開けるといつ入ったともなしにさし入る・」と書いてあるが、そんな事ではいけない・武術もさうでなければならぬ・襖でも壁でも岩でも何でも服波して通り抜ける様な光でなければならぬ・そうでなければ日本武術とは言ひ難い

後　業

後捕は肉体の魂に五体を具備せる一人格の働をなす様に武術の練習をする・後に對するの精神を敏感に働かすのが目的である。いつ後から掮りに来ても後に目をつけて居て心の窓が全身に開かれ不意の献襲に逢っても早速後が霊体一致して敏活な働きをなさねばならぬ後から掴むといふ事は捕る方も非常に危險が伴ふものである。そ

れは敵の虚を突くといふ事が心に油断を與へるからである。故に不意に思はぬ不覺を取ることがある。大いに注意を要する處である。たとへ敵が向ふを向いて居ても己れより腕が上の時は敵の体には彼に武術の精神が充實してゐるから却ってあぶない。後を取られた時には左右にかはして直ちに敵に對す。己が身をかはす爲に敵が倒れる様に練習を積む事が必要である。即ち靈感を旺盛ならしめる爲めになす術である。人体の後は精神的に武術に働く様に出來てゐる。そこで日々の練習を積んで靈感をますます敏感ならしめねばならぬ是が出來たら敵が取りに來たら前に進む事に依って敵が倒れる。

後襟

後襟を掴まれることは後方に立った敵が刀を眞向に振りかぶって切って來るのと同じ理である。女なら髪を掴んで引倒すのと同じで

ある・後襟を取られた時は速に体をかはして敵の心を取りひしぐ為に敵の面を打つか又面を水月を打って敵の心の窓を閉いでしまふ・戦闘となると後から来た敵に速かに轉換して速に敵の右横（或は左横）を突く様な姿勢に変す・又敵の真後に轉廻して右後から敵を攻める様にする。殊に腰の統一をはかり之を丈夫になす為に練習をさする・若し後捕りに於て第一回の戦闘で面を打ってその手を敵に握られた場合は速かに左足を引いて体を右にさけて切り下ろすか又右足を敵の左へ引いて敵を投げる

以上の解説は萬の技の一端にして全技に對し其の奥義たる兵道（戦道）及技の詳しき解説は冊数に限りあり時を得て實修の際是を傳授す。

技法図録並解説

座り業

一、正面

仕　右手刀で面を打ち左で脇突く同時に
膝上げる

受　右手で相手の右手を受ける

仕　敵のうけた右手をとり同時に左膝少し
進めながら右手引倒し左手で肘おさへる

二、

受　右手刀でうち出すと同時
に左手で突く

(一)

(二)

(一)

仕　打ち来る敵の右手を右手で受けると
同時に右膝後へ退いて左手で肘掴み
右下方に引き倒す

(二)

三　横面

(一)

(二)

受　右手をもつて相手の横面を打つ

仕　左膝思ひ切り右へ寄り同時に左手で敵の右手を打ち右手で敵の横面を打ち倒す

四

肩

受　右手で相手の左肩を摑む

仕　右手で面打ち左で敵の右肘打ちながら左膝進み
右手で敵の右手をとって前方に押倒す

(一)

(二)

(三)

五　袖

受　右手で相手の左袖掴む

仕　持つと同時に右で面打ち左へ寄って
左手で敵の左肘打倒す

(一)

(二)

六

受　左手で相手の右袖
掴み右手で打出す

(一)

仕　打って来るのを右手で受け
左手で膝　ついて仰向に打倒す

(二)

(三)

両袖

七、受　両手で相手の両袖をもつ

仕　右手で面うち左手で敵の右肘うって右で右手とって前方にうち倒す（四と同じ）

（一）

（二）

（三）

八、胸

受　右手で相手の胸をもつ

仕　つま先立って右で面をうち同時に左膝進めて

　　体を右に開く

(一)

(二)

(三)

九、

受　左手で相手の胸元掴み左手で打ち出す

仕　右手外からまわって打って来るのを受け
て掴み左手で胸元とった手をつかみ
十字に交はして前方につき倒す

十、

（敵の左手を右手外
から廻はして掴み左
手で胴うつ又左手
（敵）肩にかけ左の肘へ
右の肘押しつける）

（一）

（二）

（一）

十一、首締

受　相手の衿を綾にとって首しめる（右手上）

仕　右膝引きつ、面うって左手下から入れ敵の左手にかけ左手下に右手上からかけて頸をひねる

（二）

（一）

（二）

(三)

(四)

十二

受　前同

仕　左手下から入れ敵の左肩に切りおろし

　　右方に倒す

(一)

(二)

十三、

受　前同もつてねじる

仕　右手で面うち左手下から入れ
敵の左肩へ切りおろす

十四

受　前同

仕　左手上からかけ右手で
自分の左手つかむ

(一)

(二)

(一)

(二)

(三)

(四

十五　手

受　両手で相手の両手をつかむ

仕　掌を中に向け親指の見える位に立て手先に力を入れて真直に向ふに倒す　左へ倒す時は右手を充分伸ばす

（一）

（二）

（三）

十六、

受　前同

仕　指に力を入れて上け引き寄せる様にして右膝進め頭を越して後方に投け飛ばす

(一)

(二)

(三)

十七

受　前同

仕　左手下へ引き右手敵の左肩へ向けて延ばし倒す

(三)

(一)

(二)

十八

受　前同様相手の膝へおしつける

仕　右膝へ右手つけて後へ引き同時に敵の
左手右膝の上にのせ
右手とって面うつ

(一)

(二)

(三)

十九

受　両手で相手の両手を掴み押す

仕　右膝退き両手を上に向けて右方へ持って行く

二十

受　前同

仕　右手敵の右肘にかけて押付け左手とって面打ち倒す

(一)

(二)

(一)

(二)

(三)

(四)

二十一

受　前同

仕　掌上に向けて眞直にのばし左方に倒す

(一)

(二)

(三)

二十二

受　前同

仕　右手敵の右手の上に乘せ右方にはねて左手はづして右膝引き、
左手で敵の左袖引き倒す

(一)

(二)

(三)

二十三

半身半立

受　相手の右横から左手で右手とり右手でうち出す

仕　引かれるまゝ右膝進め同時に斜に右手上げ左手で敵の左手頸掴んで振りかぶり頸につける様にして左側にうち倒す

（一）

（二）

(三)

(四)

二十四

受　左手で相手の右手横からとる

仕　右膝敵の後へ進め右肘で敵の左膝押し倒し左手で左足頸摑む

(一)

(二)

(三)

二十五、

受　前同右手をもつて打ち出す

仕　打つて来る瞬間右膝左前方に進め右手前下へ

つき出す

（一）

（二）

二十六

受　前同

仕　右手敵の後下へのばし右膝右方に進め左手で

敵の左足をはね上げる

（一）

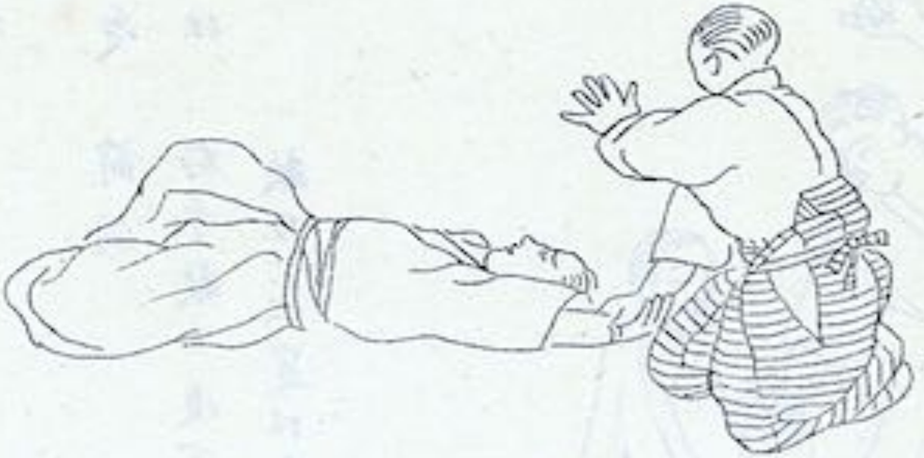
（二）

二十七

受　前同

仕　右手振りかぶり後から廻して左側にうち倒す

（三）



（一）

(二)

(三)

二十八、

受　前同

仕　右手振りかぶると同時に足膝立て右前へ少し進め左手で敵の左手頸をもつて立ち上りながら廻り左側へ打倒す

(一)

(二)

(三)

(四)

二十九、

受　相手の前から両手をとる

仕　掌を内に向けて自分の方へ引きながら上げ右足斜前に出してつま立ち頭越しして後方へ投げ飛ばす

(一)

(二)

(三)

三十

受　前同

仕　右膝一寸進め左手で敵の左足頸掴み右手で膝掴んで押倒す

（膝を持たずに　たゝき倒してもよい）

(一)

(二)

(三)

三十一

受　前同

仕　左手で敵の左手
掴み左方に引き
右手離して面うつ

(一)

(二)

三十二、

受　前同

仕　両手の掌内向けて上げ右膝
立って敵の足の間に進めつゝ、
右手からおろし頭越して後へ
投げ飛ばす

(一)

三十三

受　前同

仕　左手敵の左の上にかけて左方に跳ね右手ぬき取つて胴つき右袖引いて打ちたほす

（二）

（一）

（二）

三十四

受　前同

仕　左手　左下方に右手掌に力入れて
敵の左肩に向けてつき出し右
足進めて左横にうち倒す

(三)

(一)

(二)

三十五

受　前同

仕　左手で敵の左手もち右手前へ突き出しながら　振りかぶり右膝上げて前にまはし　つま立ち廻りながら　立って後方に倒す（右手敵の右手にかけ右足出して左手抜きとり　立ち上って左手敵の手の上に伸はし　左足敵の後へ進める）

（一）

（二）

(三)

(四)

三十六　立業　正面

仕　右手力をもつて打ち出し左で敵の右脇を突く

受　右手で之を受ける

仕　右足より進み左足踏み込んで左手で敵の右肘つかむ

（指頭に力を入れること）

（一）

（二）

（三）

二十七

受　右手をもつてうち出す

仕　敵の振りかぶつた時には入る氣持で
之を受け左足引いて体を開き敵の右
手掴んで引き
倒す

（一）

三十八

受　前同

仕　右足引いて左手で敵の右手切りおろし右手で面をうち右手で敵の右手掴み直して左手伸はし首の前へ切りおろす

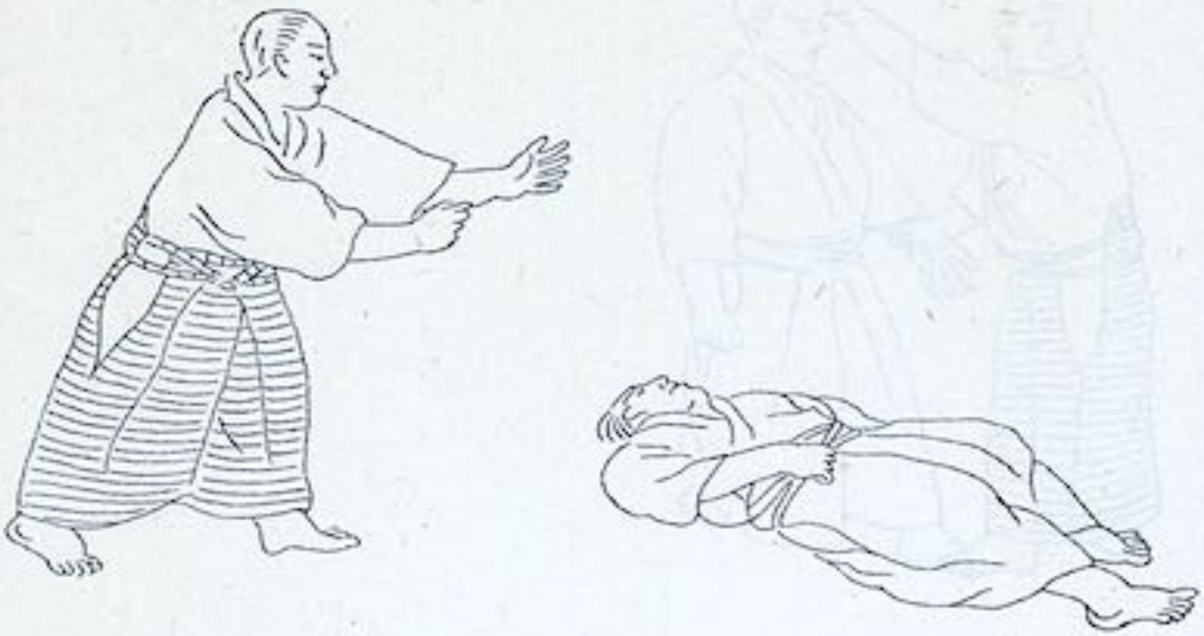
(二)

(一)

(二)

(三)

(四)



三十九

受　前同

仕　左足引いて左で敵の右手打ちおろし右手で敵の顎を押して左足再び進む

(一)

（二）

（三）

四十．

受　前同

仕　左足大きく後へ引き右手敵の首へ切り下ろし前へ押し倒す

（或は左手で敵の右手又は右袖を引くもよい）

(一)

(二)

(三)

(四)

四十一、

受　前同

仕　右手で受け左足一歩進んで左手で敵の右アバラを突く

四十二、横面

受　右手をもって横面をうつ

仕　左足左方へ出で　左手で敵の右手切りおろし　之をつかみ右手で首へうちおろす

(一)

(二)

四十三

受　前同

仕　振りかぶった瞬間右足より進み左足敵の右横へ踏み込んで
左手で額を押す

(一)

(二)

四十四、

受　前同

仕　左手で受け左足引き右で面うつ両手で敵の両手もち左足進んで喰入り右足進めてうち倒す

(三)

(一)

(二)

(三)

四十五

受　前同

仕　右足引いて右手で受け右足更に
後に引いて廻り以下前と同じ

(四)

(一)

(二)

(三)

四十六

受　前同

仕　左足引いて右手で切りおろし左足再び敵の後へ進め右手で敵の右手首（下からもち左手伸ばして左脇へ敵の首をかゝへ込む

（或は右手敵の右手を掴んだまゝ、敵の前へ廻し左手敵の後からまはして敵の右手掴み右手で右肘を押し倒す）

（一）

二ノ（一）

四十七

受　前同

仕　左足引くと同時に左膝ついて右手で敵の左脇打ち左手で敵の右袖掴んで引き倒す

二ノ(二)

(一)

四十八

受　前同

仕　左足左前方へ出ると同時に体を左方に移動して半身になつて入り両手で左後に投げる

(二)

(一)

(二)

四十九　肩

受　右手をもつて相手左肩掴んで引く

仕　右手で面うち敵の右手掴んで左肩で押し出す様に左足進んで
左手で敵の右肘掴んで前へ倒す

(一)

(二)

五十

受　左手で相手の右肩つかむ

仕　左足より進み右足敵の後へ踏み込み右肘から敵の首の前へ
のばす

(一)

(二)

五十一

受　左手で相手の右肩をもち右手をもつて打ち出す

仕　左手で受け右足を敵の足の間へ進め頭を深くさげて頭越して後方に投げる

(一)

(二)

五十二

受　左手で相手の右肩をもち右手で横面うち出す

仕　左で受けて右で面をうち両手で敵の右手をもち左足進んでくぐり前方へ投げる

(一)

(二)

(三)

五十三

受　左手で相手の左肩つかむ

仕　右手で敵の右手掴み左で面うち
左足進んでくゞり敵の右手を右
肩にかけ左手で後衿掴んで引く

(一)

五十四

前と同じで後衿掴んでから左足裏に
引き倒す

（一）

（二）

五十五

受　前同　右手で打ち出す

仕　右足敵の左横へ進め左手で敵の右肘
掴み右手で頸押し前方へうち倒す

(二)

(一)

（二）

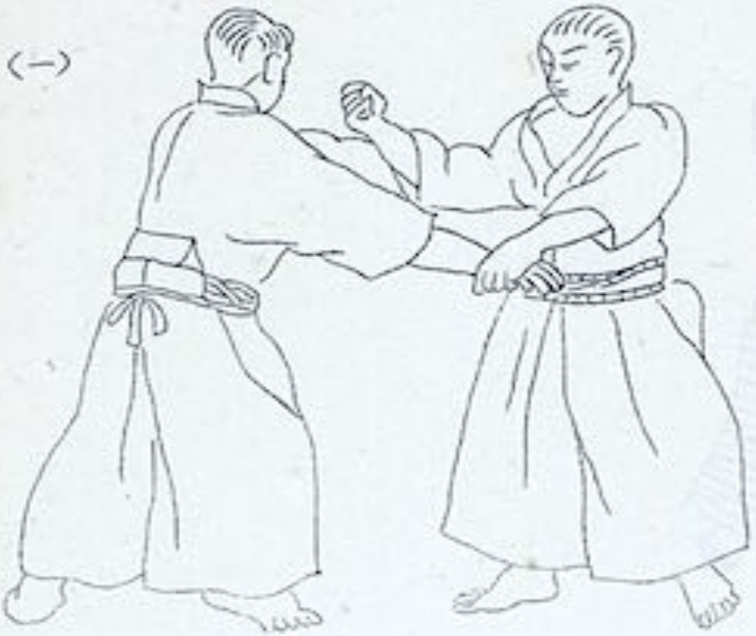
（三）

五十六

受　前同

仕　左手で受けて右でもち直して右後方に引き寄せ同時に左足一歩進め右手はなして敵の首へ巻き右足敵の後へ踏込んで前方へ押倒す

(一)



(二)

（三）

五十七

受　前同

仕　左手で受け同時に左足大きく引き右肩前へおし出して左膝ついて

左手引き前方へ引き倒す

(一)

(二)

五十八

受　前同

仕　右で面打ち左で敵の右手掴み左足引いて後へまはる

（三）

（一）

五十九、

受　前同引いて右手で打ち出す

仕　左で面うち右足進んで敵の右横へ道入り廻って右手を敵の前へ伸ばし右足敵の後へ踏み込んで右後方へ投げる

(一)

敵ノ左手ノ下ヘハイル

(二)

(二)

(三)

六十

受　前同

仕　右足進んで上体だけ敵の右脇へ這入り左で帯掴み右手で腰おして
左後方へ投げ飛ばす
（左足より進んで敵の左脇へ這入ってもよい）

（一）

（二）

(三)

六廿一　「袖」

受　左手で相手の右袖をもち引く

仕　引かれるまゝ両手刀を肘おしあげながら進み左手で敵の左手つかみ
右足敵の前へ進んで右手で肘へ切りおろす

(一)

(二)

六十二

受　左手で相手の右袖もち右手をもって
打ち出す

仕　右手内からまはし敵の左袖つかんで
右足引いて膝つく

（三）

（一）

六十三

受　前同

仕　右手で受けそのまゝまき込んでた手で敵の左袖引き右足引いて膝つき引き落す

(一)

(二)

(二)

(三)

六十四

受　前同

仕　左足左方へ出て右手で受け指頭に力を入れ首の前から伸ばし掌外へ向けてまき込み左手で後衿頸掴んで引く右足更に敵の後へふみ込む（うって来るのを右手で受けて右足ふみ込めない時は左手で敵の左袖つかんで右足後へ引く）

(一)

(二)

六十五

受　左手で相手の右袖をもち右手でうち出す

仕　腰に力入れて右足引きとられた右手で敵の右手をおさへ左手で敵の右袖を摑んで引く

(一)

(二)

六十六

受　左手で相手の右袖をつかむ

仕　右足より敵の後へ進み右肘で面をうつ左手で敵の手をつかむ

(一)

(二)

六十七.

受　前に同し

仕　同時に右手を敵の手の上からかけ左足深く後へ轉す　次に右足又後へ引く

(一)

(二)　左足引ク

(三)

六十八

受　前同引く

仕　引かれたら右足から進んで右手で敵の

胴をつき同時に右手を上へ上げる　左手で

(一)

敵の後衿首をつかみ同時に右手で胴うち
右足で敵の水落を蹴上げて押す
（左足後方へ引いてもよし）

（二）

（三）

六十九

受　前面うち出す

仕　右足右へ出　体を移動して左手で敵の面をうち右手をもたれた手の上からかけてくぐり左手で肘をつかんで前へ押す

(一)

(二)

（この場合くい入りぬけす左手敵の股へ入れ跳ね上げてもよい頸深く下げること）

七十

受　前同引く

仕　同時に右足敵の横後へ出し左手で面を打ちつゝ左足更に深く敵の後へ進む

(三)

(一)

(二)

七十一

受　前同うち出す

仕　左足から進み敵の手の下をくぐり
抜け右手で脇をつき左手で腰をつく
右足は敵の前へ踏み出す

(一)

（敵の右脇へ頭を下げて這入り左手で敵の胴を突き左足敵の前左へ進める）

（二）

（三）

七十二

受　右手で相手の右袖もち右手突き出す

仕　左足深く後へ引き右手敵の肘の上からかける

(一)

(二)

左足引く

七十三

受　左手で相手の右袖もち右手突出す

仕　右足で敵の左足踏入んで右手外上から敵の肘にかけ左足後へ引く

（一）

（二）

(三)

七十四

受　前同

杖　突いてくる手を左で持ち右肩つき出して
之にかけつかまれた方の敵の手を背に

(一)

つけ右肩斜前に突き出し
押し倒す

(二)

七十五

受　前同

仕　右手内から外へ廻して敵の袖つかみ右足
敵の後へ左足更に踏込んで左手で顎
押す

(一)

七十六

受　前同うち出す

仕　左で胴うち右足後へ引きながら右手を上から
廻して敵の左袖をとってひく
へ右手上から廻して敵の袖つかみ　左足敵の

(二)

(一)

前へ進の腰投げ頭深く（下げて左足敵の足の間へ入れてもよい）

（二）

（三）

七十七

「肩」

受　両手で相手の両肩をつかむ

仕　左で敵の両うち右足横向きに進め左足敵の後方へ踏みこむ上体を真直に
つき込み敵の手をくぐる　左肘で敵のあばらをうつ

(一)

(二)

(三)

(四)

七十八

受　両手で相手の両肩をもち引く

仕　面うちながら両手上から入れ同時に頭を入れて右足　敵の足の間へ進め

頭を下げ敵の右足掴んで跳ね上げる

(一)

(二)

七十九

受　前同

仕　左足敵の前へ右足敵の後方へ進め同時に右手外より廻し敵の手の上から首の前へ伸し左手で帯つかむ（右手内からのばしてもよい）

（三）

（一）

八十

受　前同

仕　右手で面打ち左へ肩を引き左足敵の後横へ進み敵の手の後へ頭くぐり右手で頸押すと同時に左足深く敵の後へ踏み込む

二

（一）

（二）

（三）

「手」
（片手）

受　左手で相手の手頸をもって打ち出す

仕　右手のつかまれた所に力を入れ迅速に左足敵の後へ右手ふりかふりながら

右足受にふみ込む

（一）

（二）

八十二

受　前同

仕　とられた瞬間右足深く引いて左手であばらを打つ

（左手で敵の左袖つかむもよし又右手で頸部うつ）

（一）

（一）

八十三　合氣投げ

受　前同

仕　一、引かれた時　引かれるまゝに右足敵の前左へ進め同時に右手同し方向に突き出す

(一)

(二)

二、そのまゝの時　左足後へ引いて右手前下へつき放す
（敵が手を放したら右手そのまゝ前から左手後から
廻してだき上げる）

（二）

（三）

八十四

受　前同

仕　右手外からまはし敵の手くびの上からかけ左足深く引いて投げる

(一)

(二)

八十五

受　前同

仕　左で敵の面うちながらくくり左手で肘つかんで投げる

（くぐった後右足敵の後へ踏みこんで右肘で敵のあばらをうち乍ら押倒す）

(一)

(二)

八十六

受　左手で相手の右手頸掴む

仕　もたれた直ちに右足から進み左足敵の後へ踏み込み右手をのはす

（敵が足を引いたら左足踏み込み左手で敵の右袖引く又右足敵の左へ踏込むもよし）

（三）

（一）

八十七

受　前同

仕　左足から敵の前へ進の同時に右手敵の首の前へのばし右足敵の後へ踏込み左手で敵の右手押へて右下ヒ真下或は後方へ押倒す

(二)

(一)

（左でもちかへ右足敵の後へ踏込んで右手で敵の首をかゝへ込んでもよい）

（二）

八十八

受　前同

仕　左手で面うちその手で敵の右手をとり同時に左足後へ引いて右手で肘おさへて突き倒す

（一）

八十九

受　前同引く

仕　左で面打ち右手グット突き出して上げ右足踏込んで敵の左足ふみ右手で腰押し左手で首をおさへる

(二)

(一)

九十

受　左手で相手の右の手頸をつかむ

仕　左足敵の前へ右手内から上け敵の首の後へ廻し右足敵の後へ進め左手首の前から廻して右手で後衿首を引いて左足更に深く進む

(二)

(一)

（右手敵の首の前へ突き出し左手で帯つかみ右手切りおろす）

（二）

（三）

九十一

受　前同

仕　右足一歩出て左足後へ轉じ鼓き後方に投げる

(四)

(一)

九十二

受　前同

仕　掴まれた右手斜前に突き出し左でとり直し左足後へ踏じ右肩を上げ敵の左手を引いて後へ倒す右足は敵の後へ進める

(二)

(一)

（右手で胴を打ち頸深くさげて右足敵の後へ左手グット伸ばして
背を越して投げ飛ばす）

（二）

九十三　呼吸（両手）

受　両手で相手の両手とり右足出す

仕　(一)　敵と同じ側左の足が出て居たら右足後へ引いてまはる　掌に力入れて充分のばす

(二)　敵と反對側右の足が出てゐたら左足大きく進んでまはる

二

(一)

(二)

四方なげ

足は前と同じで(一)の場合は右手で敵の右手を摑んで振りかぶる (二)の場合も同様右手で敵の右手を摑んでふりかぶりながら進む

(三)

九十四

受 両手で相手の両手を摑む

仕 左足より進み右足敵の左後へ(向合から見て)へ進み左手伸ばし右手真正面に振りかぶりつゝ進んで首へ切おろす

(一)

九十五

受　前同

仕　右足敵の前へ左手つき上げて首の向ふ側へ押し氣味に突出す左足は敵の後方へ進める左手は掌を上に向ける

(二)

(一)

第十六

受　前同

仕　もたれた膝間左足引いて両手指を真直に立てて乱き此処をあげ更に後へ下ろして敵を躍を越して投げる

（左手はなして敵の左腕を掴んでもよい）

（二）

（一）

(二)

(三)

九十七

受　前同

仕　右足敵の左横へ出しながら右手同じく左斜前につき出す

(一)

(二)

九十八

受　前同

仕　右足より進み右足敵の後へ出し左手敵の前へ押し氣味に上げ首の手前から後へまはし右手は首の向ふ側へ切り下す敵左の手を放し天ら後衿首をつかむ

(一)

(二)

九十九

受 前同

仕 右手外から廻して引きつり込み右足一歩進んで腰投げをかける

(一)

(二)

百

受　前同

仕　左足引いて腰投げ

(一)

(三)

(二)

(三)

百一

受　前同

杖　右足踏み込んで右手で面うち更に左足大きく後へまはり左手を充分下げて右手をあげる

(一)

(二)

(三)

(一)

百二

受　前同

仕　右足敵の左横へ進めながら右手敵の右手の肘の上から斜前につき出す

百三

受　前同

仕　右手で敵の右手つかみ左手右斜前へ突き出して放し敵の左手を上から掴んで左足ふみ込みながらくぐって投げる

(二)

(一)

(二)

(三)

百四

受 前同

仕 右手敵の左肘へかけ左手放して後衿首掴んで引く又は左で面うつ

（左手敵の前へのばし胴をかゝへ右手足の下へまはして敵を投げする

左足は敵の後方へ進む）

（一）

（二）

(三)

百五　「胸」

受　右手で相手の胸元掴んで引く

仕　右手で面うち掴んだ手をとって腰をちよっと下げて引かれるまゝに左足深く進み左手敵の肘関節にかけておす

(一)

(二)

百六

受　前同押す

仕　左足引いて左で面うち乍ら敵の手をとつて体をかゝめる様にしてとり氣味にして右手で肘関節を掴んで引く

(一)

(二)

百七

受　前同

仕　・面うち乍ら左手で敵の左手掴み左足引いて
右手で胴かゝへて右足敵の前へ進む

(三)

(一)

（左足ひいて左で敵の左手摑み
右肘関節にかけ左手で後衿首
摑み直し右で腰押す面打つ
時右足少し右へよる）

(二)

百八

受　前同

仕　左足一寸出し体をひねって右手敵の
右首へ切り下し右足左側へ一歩進む

(一)

(二)

(一)

百九

受前同　右手をもつて打ち出す

仕　打つて来る手を左で受け右でもち直し左で

胸を掴んだ、手をとり左足進んてくぐる

（二）

（三）

百十

受　前同

仕　左手で受け右手で面打ちながら上から入れ右足出して頭充分下げ左[illegible]く

（打って来る時右手上から入れ打って来る手を受けすに頭を下げて後方へ[illegible]投げ飛ばす）

（一）

（二）

百十一

受　前同

仕　右手外からまはし右足進んで右手真直に
敵の首の前へのばす
（右手其のまま内から真直にのばす）

（三）

（一）

百十二　受　右手で相手の胸元深くつかむ

仕　右で敵の面を打ち敵の右手くびを右手で
下からつかみ敵の手の外側からくぐる

(二)

(一)

百十三

受　左手で相手の胸元つかみ右手をもって
打ち出す

仕　打って来るのを右で受け左足一歩出て
体を開き右手敵の肩へ切りおろす
右足更に進む

(一)

(二)

（二）

（三）

百十四

受　前向

仕　右で受け右足引いて左手で敵の左袖つかんで引く

(一)

(二)

百十五

受　前同

仕　前と全じく右足引いて左手で胴つく

(一)

(二)

百十六　「胸ト手」

受　左で相手の手頸をもち右手で胸元掴む

仕　引かれたら引かれるまま掴れた手　振りかぶる様にして左足より進み
右足敵の後へ進んで切りおろす

(一)

(二)

百十七

受　前同

仕　右手外から廻し　いなしながら左手で袖を引いて左足より進み右足一歩這入って左手で敵の左袖掴んで引く

(一)

(二)

百十八

受　前同

仕　右手もたれた瞬間左斜前へ突き出して左足進んで左手でとり直し右手で敵の右袖つかんで右足進む

(一)

(二)

百十九

受　前同

仕　右足敵の後へ進み左手で敵の左手もち直し右手はなして後襟首掴み

左手真直のばして首かゝへ込む

（一）

（二）

百二十　「首締」

受　両手で絞にとって首締める

仕　右手で敵の左袖引いて右足充分引き左手で胴うつ

(一)

(二)

百二十一

受　前同

(一)

百二十二

仕、右で面うちをながら右手上から入れ左足一寸引いて敵の手の左側からくぐり　其儘　両手を真直にのばす

二、くぐってから右手を外に出し胴をうつ

三、同様右手を出して帯掴んでつり上げる

(二ノイ)

（二ノロ）

（二ノハ）

百二十三

受　前同

仕　肩で敵の手をおし上げて背負ひ投げする

(一)

肩を上げる

(二)

百二十四

受　前同

仕　左手下から入れ敵の左腕にかけ右手で頸押へ同時に右足進む

（左足引いて面うちながら左手で敵の右袖もちながら右胴から這入り右手で

首おさへる）

（一）

（二）

百二十五

受 前同

仕 右手下から入れぐつと伸ばし右足 敵の左側に進んで左手で頸押へる
（右手で帯つかみ左足敵の後へ進めて左手で頸押さへる 又右手上か
らかけ左足進む）

(一)

(二)

百二十六

受　前同

仕　右手下から入れ敵の右肩に向けて充分のばし切りおろす　右足敵の左後方に進める

(一)

(二)

百二十七

受　前同

仕　右手下から出し敵の左肩から後へまはし右足敵の左後へ進め右手頭の後へまはしてしめ　顎でおさへる

(一)

(二)

百二十八

受　前同

仕　もたれた下を左手でもち左足引いて左へ体を開く
（衿を開く様に両手でもち左側から這入る）

（一）

（二）

百二十九

受　前同

仕　左手敵の左側へつき出し右足敵の左後へ進む反對に左足引いてもよい

（右手上から掛け両手伸ばして左足引き切りおろす）

(一)

(二)

百三十

受　前同

仕　左足敵の後へ進め左手上から敵の手をかゝへ右手足の下から入れて敵を上げる

(一)

(二)

百三十一

受　前同

仕　かゞんで右手で敵の足の甲をうつ

（或は両手で敵の右足をおさへる）

(一)

(二)

百三十二

受　前同

仕　右手上から入れ大きく左へまはり敵の頭を左の脇下にかゝへ込む

(一)

(二)

百三十三

受　前同

仕　左手ふりかぶりつゝ頭を敵の手の左側から入れ手の間へ出し

左足敵の後へ進め左手伸ばして左後方に打ち倒す

(一)

(二)

後業

百三十四

「後衿」

受　両手をもつて相手の後衿をつかむ

仕　右足真後へ引きつゝ右手振りかぶり左手で敵の面をうつて左足大きく後へさがり敵の手の後へぬけて右手で敵の右手をとり左手で右肘おさへて左足再び進み前方に投げ飛はす

(一)

(二)

(三)

(四)

百三十五

受　前同で行く

仕　右足一寸引き左手の掌を上に向けぐっとのばし、

体を真直にして真下へ切りおろす。

(一)

(二)

（三）

百三十六

受　前同

仕　右足一寸引いて左手で面打つ

（一）

受　左手でこれを受け、つかむ

仕　掴まれたまゝ左足敵の後へ引き
左手真下へ切りおろす。

百三十七

受　右手で相手の後衿をつかむ

仕　左で胴を打ちながら左へ廻り（左足ひいて）右足更にふみこんで右手で頸をおす。

（二）

（一）

百三十八

受　右手で後衿、左手で捕手の左手頸をつかむ

仕　右足引いて半ば右へ向き左足引いて敵の後へ出し、左手敵の前から、右手下から足の間へ入れてすくひ上げる。

(二)

(一)

百三十九

受 右手で後衿、左手で相手の左手頸を掴む

仕 右足敵の右後に大きく引き、左手で前に誘導しつゝ、右肘で同時に敵の右脇をうち倒す。

(一)

(二)

(二)

百四十

受　前回

仕　左手上げて同時に体を左にまげ、頭を越して右斜前にたゝき倒す。

左手あげつゝ迅速に右足を後に引きながら水落を打ち、左足を後に引いて自分の前に引き倒す。又左足引いて右足敵の後へ引き左手頭を越して前へもつて来、右手で敵の後衿掴み左足前から

まわり敵の後へ進め左手のばす.

或は右足後に引き左手頸越しに前へまはし右手敵の手の間から真直にのばす.

又同じく後へさがり右手を敵の上からかけ、まきこむ様に前に投る.

右手をもって敵の胴をかゝへ右前に投げる.

左手をあげて頸越し同時に右足敵の足の間に入れ腰を深く入れて腰なげかける.

(二)

(三)

百四十一

受　両手で相手の両肩をつかむ。

仕　左手頭上にふりかぶり頭を圍ふ様にし、同時に左足半ば進み腰を下げて右に廻轉し左足敵の後へ進め、同時に左肘又は両手を充分のばして敵を左後方へ投げ飛ばす。

「肩」

(一)

(二)

(三)

(四)

百四十二

受　前回で引く

仕　同時に右足一寸さがり左足敵の後へ引き同時に左肘で敵の水月を
うち倒す。

（一）

（二）

百四十三

受　前同でおす

仕　百四十一と同じ要領で右に捩じ同時に右手で敵の右手を掴み、左手に力入れ左足を左後に引くと同時に左手で敵の右腕を強く打ち倒す。

(一)

(二)

百四十四

支　前回でおす。

仕　百四十一と同じ要領で廻り、右足はいり左手で頭をおさへ右手で胴を打つ。

(三)

(一)

百四十五

受　前同で引く

仕　左から引き右足後へさがつて敵の手の後へ頭を出し左手で敵の肩を押へ右手で帯を掴み、頭で胴を押す。

（二）

（一）

(二)

(三)

百四十六

受　前同

仕　左の踵だけ廻し、体を左に引きながら頭を下げて右手と共に敵の手の後に出で、右手敵の手の上からかけ腰で右横におす。

(一)

(二)

百四十七

受　前回

仕　左足歓の右後へ引き、左手上から右手足の下から入れ、だきあげる。

(一)

(二)

百四十八

受　前同

仕　左足より敵の後へさがり頭を敵の手の後へ出して、右手上から左手下から首をひねる。

(三)

(一)

百四十九

受　前同

仕　右手振りかぶり右足前から廻して
左へ廻り右手敵の手の下からぐつ
と伸ばして切りおろす。

(一)

(二)

百五十　「腕」

受　両手で相手の両上膊をつかむ

仕　掴まれると同時に両肘を後上に引き上体を前にかゝめ
左足献の左後へ引き仰向に投げる。

(一)

(二)

百五十一

受　前同で前へ押す。

仕　右手振りかぶり　右足進めて左に轉じ
右手で首を押へ左手で敵の左袖引く。

(一)

(二)

百五十二

役　前同

仕　右足敵の左後に引き、体を引き左手で敵の左手を押へて自分の胸につけ、右手で敵の左肘をおし、前へ押し倒す。

(一)

(二)

(二)

(三)

百五十三

受 前胴

仕 両手をあげて右足少し後に引き、更に左足大きく後にさがると同時に右手で敵の面を、左手で胴をうつ、

（一）

（二）

(三)

百五十四「手頸」

受　両手をもって相手の両手頸を掴む、

仕　右足後に引き右手頸を越して前へ廻し、左足敵の後へ引き、左手で肘をつかんで左足更に前へ進む押し倒す。

(一)

(二)

百五十五

受　前岡

仕　右足前から左に廻し同時に右手をあげて左に廻り両手をのばして敵をせりかへらせ仰向に倒す。

(三)

(一)

(二)

(三)

百五十六

受　前同

仕　左手前下へ誘導し右手を敵の右後へまわし、右足後へ引いて体を崩け右横方に打倒す。

(一)

(二)

百五十七

受　前同

仕　右足出しながら両手を上に向けて前へつき出し、上げると同時に左足敵の右後へ引いて両手前下へおろし、頭を越して前方へ投げ飛ばす。

(三)

(一)

（二）

（三）

(四)

百五十八

受　前同

仕　足を出さずに両手をあげ、前下へおろすと同時に右足敵の左後へさがり前方へ投げる。

(一)

（二）

（三）

百五十九

受　前同

仕　前と同じで、右足敵の足の間へ引いて投げる。

（四）

（一）

百六十

受　前同

仕　右足からさがり左足敵の右後方に引いて体を後に引き、右手右後に引きつゝ両手下へさげて前方にこかす。

(二)

(一)

百六十一

受　前同

仕　右手後へまげ、左手あげて頭越して右肩にかけ右手肘をまるく巻き込む様に前にまげて敵の左手の内側に入れ右足一歩前に出て左手を引きつゝ前方に投げ飛ばす。

(二)

(一)

百六十二

受　前同

仕　左足よりさがり右足敵の左後に大きくさがつて左手で敵の右手をつかみ、右手はなして胴をうつ。

(一)

(二)

百六十三

受　前同

仕　両手をあげて左足進み、右へ回轉し右足敵の後へ進めて右手ぐっと伸ばす。（左手をあげ、右手を引いてもよい）

（一）

（二）

(二)

(三)

百六十四

受　前同

仕　左手あげて敵の左後へ出て右足で敵の右足踏み
左手で首を押へる。

(一)

(二)

百六十五

受　前回で引く

仕　上体前にかゞめ、両手上に向けて上へ出し、体をのばして
　右足敵の左後へ引き右後方にうち倒す。

(一)

(二)

百六十六

受　両手をもって相手の両手頸を下からもちあげる

仕　右足敵の左後へさがり，左手腰につけ右手のばして敵の胸元へ切りおろす．

(二)

(一)

(二)

合氣柔術

右目録相傳候事依如件

植芝守高

植芝守高

昭和九年四月吉日